

アクション・リサーチを通じた夜間短期大学における 学習記録手帳と振り返りによる自律学習支援

河野 弘 美
谷 村 緑

〈Summary〉

This paper is action research on academic supports for autonomous learning by using learning journals for planning and reflective practice, specifically designed for students at Kyoto Junior College of Foreign Languages. The students need to set goals at the time of admission and carry their plans into effect, because they have to decide whether they seek a way to take employment opportunities or plan to go on to further higher education, usually by transferring to a four-year university. However, due to the ending time of the classes, the students cannot easily meet and talk with other students and/or their academic advisors after their classes. To compensate these situational and environmental issues, hence, our research group launched a project of academic support and developed learning journals or autonomous learning log notebooks which may help students build the ability to set plans for academic, vocational and personal success. The research target class of this paper is a mandatory English class taken by 28 first-year junior college students. We analyze detailed descriptions of the instructor's behavior such as how she made use of the learning journals, her observation of each student; a written questionnaire survey by students; and interviews with students. In this paper, we highlight classroom practice and explore to better understand how learning journals and other learning resources enhance students' learning and how the teacher reflects on her practice to develop herself professionally. We also illustrate that visualization by journals provides a form of intersubjectivity or shared or mutual understanding which helps teachers and students jointly collaborate in learning.

1. 研究の背景と目的

本稿は、夜間短期大学における教育実践の課題を可視化し、授業改善を図り、短期大学生の自律学習支援の方法を探ることを目的とする探索型アクション・リサーチである。具体的には、学習記録と振り返りを通して学生は何を实践し、どのような気づきをしたのか、また、授業担当教員は学生をどのように理解し、どのように対応し、結果どのような成長を遂げたのかを明らかにする。そして分析結果に基づき自律学習支援についての教育的示唆を述べる。

我々研究グループは、大学学部生用の学習記録手帳を2016年に作成している（河野，2016；谷村他，2017）。当該の学習記録手帳には自律学習に役立つ情報や学習方略例などが詳細に記載

されており、自己充足型の学習支援を可能としている点で評価できる。しかし、短期大学生は入学と同時に2年後の進路選択を視野に入れつつ、目標設定をし、学習を開始していくことが求められており、短期速攻型の学習習慣定着を促す学習記録手帳を必要としていた。言い換えると、大学学部生の4年間と同じ方法での学習支援では対応できないという問題があった。また、既存のカリキュラムにキャリアプランニング科目はあるものの、TOEICでのスコアアップといった比較的直近の目標達成や、就職活動や進路決定といった長期的な目標達成のための準備や計画を含む学習方略のための科目提供がないという問題もあった。さらに、本学の場合、短期大学の授業は夜間に開設されており、必修授業が最終講時の場合には21時を過ぎるため、学習サポートに関連した学内施設を利用することも、修学アドバイザーとの面談や個別指導を受けることも難しいという問題もあった。これらに加えて、2017年度に短期大学生1クラスで学習記録手帳を使用した際に、多くの学生より学習方法に関する説明書きは不要、持ち歩きやすいように薄くして欲しいなどの意見が頻出し、短期大学生のニーズに合致していないことも明らかになった。従って、それらに代わる短期大学生の学習をサポートする学習支援ツールの構築が必要となった。このような様々な課題を背景に、短期大学生の要望に沿って「学習記録」と「短期大学2年間計画表」に焦点を絞った短期大学生向けの学習記録手帳を作成し、授業に組み込んだ。具体的には、学生の自律学習を習慣化させ目標を達成していく力を養成するために適切な学習方略の提示・提供を行い、学習記録手帳を介した自律学習支援のための授業実践を開始した。

この自律性であるが、一般的には自分の責任において学ぶ能力 (Holec, 1981; Knowles, 1975; Ryan & Deci, 2006) と定義される。本稿ではこの能力をより具体的に示している Benson (2013) の “often find themselves, or willingly place themselves, in situations where they have little direct control over their learning” (p. 87) に従い、ほぼコントロールされない環境に進んで身を置き、学習を進めることと定義する。つまり、誰かに強いられて、いやいや行うものではなく、自身の選択により学習を進める能力ととらえる。これは学生にすべての活動を一任することと必ずしも同義ではない。しかしながらこのことは意外に知られておらず、教育現場では学生にまったく自由に学習させるだけといった誤った理解がなされていたり、学生へのフィードバックに時間をかけることによって学習内容を消化できなくなるといった誤った懸念が語られたりしているとの指摘がある (青木, 2001; Little, 1991)。また、Reeve (1996) による調査では、コントロールする教員は、学生や保護者からより高い評価を得ており、また、そのような授業形態のほうが短期的には生徒や学生の学習がより進むという結果も示されている。このように、自律学習に対する誤った理解や、教員によるコントロールを短絡的に求める学生や保護者の存在は否定できない。しかし、卒業後も様々な場面での学習は続くため、生涯学習をふくめた長期的な視野に立つならば、適切な自律学習方法を獲得しておく利点は大きい。

教員にできることは、このような自発的な学習の能力を獲得させることではなく伸ばしていくことであるから、本稿では、自律学習の範囲に教員の支援に基づく形式を含める。教員の支援に基づく自律学習というとらえ方の利点には、教員との対話を通して学習の展望、学習量また学習

の質をより現実的なものにできること、ある目標に対してより適切な学習方略を協働で探索できること、学習内容や学習方法を可視化することでクラスメートとも共有できること、各学生の学習方法が共有されることでさらなる学びの場を生み出すことができることなどを挙げるができる。

このような考え方は決して新しいものではなく、古典的な研究の一つとして Knowles (1975) は、持続的な教員・学生間のコミュニケーションの機会の重要性を指摘している。また、Brockett and Hiemstra (1991) は“an educational agent or resource often plays a facilitating role in this process” (p. 24) と、教育者や学習リソースが学習プロセス促進の役割をしばしば担っていると指摘している。さらに、Reeve and Jang (2006) による調査は、学生をコントロールする教員と自律学習を支援する教員の行動の比較から両者の特徴的な行動様式を明らかにしたうえで、教員による自律学習支援の利点を示唆している。学生をコントロールする教員の特徴としては、学生の学習方法を教員が決定する（他の学習方法を選択肢として与えない）、学生に代わって教員が問題解決をする、学生に考える機会を与えずに解答を与える、should（～すべきだ）、have to（～しなければならない）といった義務、強制、忠告、命令を意味する表現を多用するなどが示された。一方、自律学習支援に積極的な教員は、学生の声を傾聴する、学生の課外学習のための時間をつくる、学生の話聞く時間をつくる、学生のできたことを褒める、努力をエンカレッジする、学生にヒントを与える、学生の質問に答える、学生の承認要求を満たすなど、学生に丁寧に対応することが示された。それに加え、自律学習支援に積極的な教員は学生への働きかけを通して学生を変容させるだけでなく、学生もまた教員を変容させ、さらなる支援へと動機付けることが示された。つまり、学習支援に積極的な教員の行動と学生の学習意欲は双方向的に影響しあうという興味深い結果が示された。実際、個人による認知活動の改善には限界があり、他の学生との協働や教員による支援の機会が学習を促進するという考え方は妥当であると考えられる。

このような相手への働きかけの技法には、ビジネス、医療、看護、スポーツなどの分野で蓄積があり、コーチングと呼ばれる（原口, 2010, 2014; 石川・板倉, 2012; Whitmore, 2017）。このコーチングは「積極的傾聴によって始められるコミュニケーションであり、目標に向かって行動を促すコミュニケーションでもある。また、コーチングでは自己基盤が整うことによって人は行動に移ることができる」（石川・板倉, 2012, p. 8）と定義される。International Coaching Federation (2019) が発表した ICF コア・コンピテンシーモデルでは、クライアントとの信頼関係、傾聴、気づきや学習の促しがコーチングの実践で効果的であることが示されており、自発的な学習支援に有用であることが明らかになっている。本稿との関係では、問題解決に役立つコーチングの技法として広く用いられている GROW モデル（Whitmore, 2017）が参考になる。GROW モデルはビジネスの分野で主に使用される Goal, Reality, Options, Will の4つの項目からなる線のモデルである。汎用性の高さから言語学習にとどまらずさまざまな学習の機会にも応用されており（坂本, 2018）、卒業後のキャリア形成や生涯学習にも応用できるという利点がある。教育場面に照らし合わせてその技法を具体的に見ていくと、まず、Goal で教員が学習者になに、

なぜ、どうやってといった質問を行い、一緒に具体的に実現可能な数値目標を設定する。その際、教員は、学習者の意向をくみながら、学習者を受容することが求められる。次に、Realityでは、学習者に現状をどのように認識しているかを語る。Optionsでは、ブレインストームを通して実行可能な選択肢に絞り込み、学習者に何ができるかを考えさせる。最後のWillでは、学習者の物理的また心的負担を取り除きながら学習者に計画を実施させるための支援を行う。このような4つの段階を踏みながら、学習者の自発的な選択に基づいた課題解決を図る。課題は必ずしも簡単に達成されるとは限らず、達成できないことも往々にしてあるが、努力不足による実施の不成功を非難することは学生のやる気をそぐことになる。このような時には、計画の不備やストラテジーの選択ミスといった「やり方」の問題に落とし込むことで、再設定を促す。その際、教員は学生を否定しない、否定されたと思わせないなどといった学生に寄り添った対応の工夫が求められる、このような教員との協同が段階的な学習者の自律性育成に役立つ。本稿ではこのような考え方に基づき、自律学習支援を行う。

2. 方法

2.1 研究対象者

本稿では、短期大学のキャリア英語科に2018年度入学した1年次1クラス21名を対象に研究調査をおこなった。調査開始時の調査対象人数は28名であったが、3名は2年次再履修学生（春学期のみ）、1名は春学期途中で退学をした1年次生、3名は授業の欠席が続き年間を通しての調査が困難であった1年次生であり、最後の研究調査結果からそれら7名は除外されている。学生は、入学時（4月）のTOEICスコアにより学内で決められた習熟度別クラス編成の中位から下位クラスに在籍する学生である。短期大学の授業は夕方18時以降に開講される科目が多く、日中あるいは夜間に就業する学生がいるのが特徴の1つである。

2.2 調査期間、学習記録手帳、対象科目

調査期間は2018年度の2018年4月10日（火）～2019年1月8日（火）の学期期間中である。春学期は2018年4月10日（火）～7月10日（火）、秋学期は2018年10月2日（火）～2019年1月8日（火）で、調査対象者は、各該当学期期間中に学習記録をつけ学習効果の調査がなされた。春学期は学習記録シートというタイトルのA4シート1枚、秋学期は41頁からなるB5サイズの学習記録手帳1冊を授業内学習副教材として組み込み利用した（補足資料1：学習記録手帳の使用例参照）。なお、本論文では内容の混乱を避けるため、学習記録シートと学習記録手帳を総じて「学習記録手帳」と統一している。ただし、学習記録のデザインやスタイルに関する問いの箇所では春学期に使用した教材を学習記録シートとよんでいる。良い教材の条件として、見た目や分かりやすさの重要性が指摘されているように（衛・林，2011）、学習の動機付けには視覚的な効果が不可欠であるため、プロのイラストレーターに、字の大きさ、図・表、イラストなど

のレイアウトを総合的に担当してもらった。

対象科目は、短期大学1年次配置必修科目「Reading and Writing I」（春学期）と「Reading and Writing II」（秋学期）で、英語の「読む」と「書く」に焦点を置いた通年の科目である。週1回6限（19時20分～21時）配置科目の1回100分授業、全14回が各学期期間に行われた。

2.3 調査実施者

調査実施者は、調査対象科目を担当した短期大学専任教員1名と本研究グループの（当時）京都外国語大学専任教員1名である。研究対象科目内（一部外もあり）での学生へのフィードバックや学生とのインタビューは、前者の科目担当教員1名が実施した。科目担当教員は修学アドバイザーでもあり、年に2回のインタビューは、必修対応の一つとなっている。また、科目担当教員は授業に早めに行って休み時間に学生と対話するなど、コミュニケーションをとるようにしていた。学生が学習記録手帳を記入している際には巡回して、学生と話すよう心掛けた。後者の教員は、研究グループの一員として科目担当教員と定期的にミーティングを行い、学習記録手帳の記述内容をチェックした。また、科目担当教員から授業の様子を聞き取った。

2.4 分析手順・方法

本稿が使用するアクション・リサーチは、反省的实践として注目されている研究手法で、横溝（2009, p. 85）は「教師が自己成長のために自らの行動を計画して実施し、その行動の結果を観察して、その計画に基づいて内省するリサーチ」と定義している。基本的には計画－実行－評価のサイクル（Lewin, 1946）で実行されるもので、教育の分野では、担当クラスの授業指導計画や実践記録また学生へのインタビューなどから課題を見つけ出し、その手立てを考え、具体的な改善を実践し、その経過と結果を複数の調査方法から分析・報告し、省察を通して授業担当者の成長を促すという手順になる（秋田, 2005；Burns, 2010；佐野, 2005）。実践の現場では日々さまざまな問題が生じており、実践者である多くの担当教員は当事者として課題解決に臨むが、当該の手法では実践者の豊かな経験値と研究者の知見や視点を合わせた共同での実施が推奨されている（横溝, 2009）。つまり、実践者にしか分からない現場の課題（多くは暗黙知）を、研究者との相互行為により、言語化し、認識可能にするという考え方である。このように可視化された暗黙知は、相互主観的で、理解可能であり、したがって、研究の妥当性、信頼性が担保される（岩田, 2011）。これはある実践にかかわる人々の情報の非対称性の是正を意味することから、授業担当者と研究者が課題を相互主観的に共有するために役立つだけでなく、担当者と学生が理解を深めるうえでも役立つ。

本稿では、横溝（2005）が推奨する課題探求型アクション・リサーチを採用する。これは、現場の複雑さを記述することに適しているとされる実践者の実践の場で生じる課題を記述し、解決に向けて省察を行うプロセスを指す。この手法は仮説－検証型の研究手法とは異なるので注意が必要である。仮説－検証型の研究では、どのような板書が効果的かといった特定の問題は解決す

るかもしれないが、その周辺にあるさまざまな問題を見えにくくさせてしまう可能性がある。本稿のように教室という様々な文脈のなかで、学生がどのように学習記録手帳を使用し、自身の学習を振り返ったか、また、教員はどのように学生を理解し、学生との対話を通してどのように成長したかといった内容の場合、探索的にとらえる方法のほうがより適しているといえるだろう。

本稿では手順に従って、以下のようなサイクルで学習記録手帳の使用と振り返りに関して調査を行う。

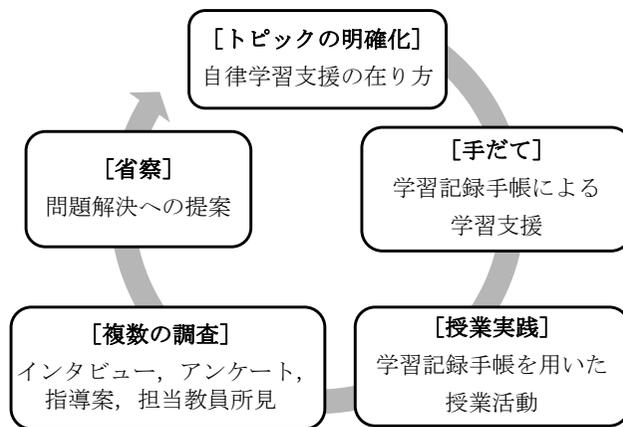


図1 本稿の探索的アクション・リサーチの方法

本稿の課題は自律学習支援の在り方であり、短期大学生を支援するための手立てが学習記録手帳を使用した学習支援となる。我々はこの課題解決に向けて、学生へのインタビュー、アンケート調査を行った。また、学生に学習記録を取らせるための方法や授業実践方法を協議し、指導計画、実践の記録といった文書類を共有した。そして、定期的にミーティングを行い、学習記録手帳の使用状況や学習記述内容について話し合った。そして、自律学習支援における課題解決において以下の手順をとった。

- ①学習記録使用に関する授業実践の詳細な記述を残す。(補足資料1: 学習記手帳の使用例参照)(表1: Week 1～Week 6)(表2: Week 2～Week 14)
- ②学習記録の振り返りや自由記述アンケートから、学生が使用する学習方略や学習動機について分析する。(表1: Week 13 後実施)(表2: Week 14 後実施)
- ③学生へのインタビューから、学習記録の効用に関して分析する。(補足資料2: インタビュー項目(学生に対する)参照)(表1: Week 3以降実施)(表2: Week 8以降実施)
- ④科目担当教員に対してインタビューを行い、その内容を分析する。(補足資料3: インタビュー項目(担当教員に対する)参照)(表1及び表2のWeek 1とWeek 2～授業終了までの間、及び授業終了以降複数回実施)

3. 結果と考察

3.1 学習記録に関する授業実践内容

春学期と秋学期の学習記録方法の大きな違いを確認しておく（詳細は図2参照）。この違いが生じた理由は、春学期の自律学習支援課題を検討した結果、学習記録の利用方法が修正されたことによる。

春学期の授業方法の詳細は下記表1のとおりである。

表1 春学期の授業方法

授業 Week (月日)	調査学生の実施事項	担当教員の実施事項
Week 1 (4月10日)	・春学期と短期大学2年間の目標記入	・記入事項の確認
Week 2 (4月17日)	・記述済目標確認 ・記述漏れ事項記入 ・学習プラン2つ記入 ・次週までに短大2年間の計画を考える	・記入事項の確認
Week 3 (4月24日)	・2年間計画記入（進学 or 就活） ・学習プランの実施状況記入	・学習実施記録にコメント記入 ・修学アドバイザーインタビュー開始
Week 4 & 5 (5月8日 & 15日)	・担当教員からのコメント確認 ・短大2年間計画に必要な資格等記入 ・学習プランの実施状況記入	・学習実施記録にコメント記入
Week 6 (5月22日)	・担当教員からのコメント確認 ・学習プランの実施状況記入 ・Week 2～Week 5の学習実施状況を振り返り、修正事項再記入 ・学習プランの複写を保管	・「学習プラン」の変更の有無確認 ・回収
Week 13 (7月10日)	・学習記録シートを見直しと学習実施事項振り返り ・達成できたこと／できなかったこと、向上した英語力、短大2年間の目標再設定等の記入	・記入事項の確認 ・回収

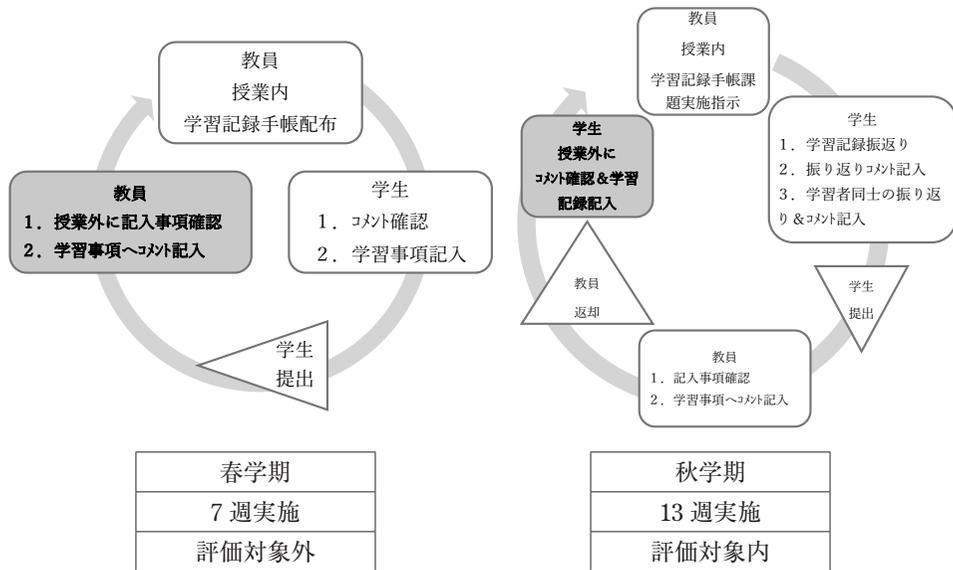


図2 春学期と秋学期の学習記録の違い

注 1) 塗りつぶし箇所：授業外実施，塗りつぶし無し箇所：授業内実施

次に秋学期に実施した調査手順を説明する。秋学期の授業方法の詳細は下記表のとおりである。

表2 秋学期の授業方法

授業 Week (月日)	調査学生が実施した事	担当教員が実施した事
Week 2 (10月2日)	<ul style="list-style-type: none"> 目標の設定と記入 多読の実施記録記入→提出 外国語自律学習支援室*利用，1週間の学習実施 記録記入は授業外課題 	<ul style="list-style-type: none"> 記入事項の確認 返却
Week 3 (10月9日) ～ Week 7 (11月6日)	<ul style="list-style-type: none"> 1週間の学習記録の振り返り，コメント記入 多読の実施記録を記入→提出 担当教員からの振り返りへのコメント確認， Week 7はコメント確認なし 	<ul style="list-style-type: none"> 記入事項の確認とコメント記入 多読と外国語自律学習支援室施設利用実施状況確認 返却，Week 7は回収
Week 8 (11月13日)	<ul style="list-style-type: none"> 担当教員からの振り返りへのコメント確認 Week 2～Week 6の振り返り，学習実施方法の見直し実施，記入→提出 	<ul style="list-style-type: none"> 返却 記入事項の確認 返却 インタビュー開始

Week 9 (11月20日) ~ Week 13 (12月18日)	<ul style="list-style-type: none"> ・1週間の学習記録の振り返り, コメント記入 ・多読の実施記録を記入 ・ピア同志の振り返り, コメント記入→提出 ・担当教員からの振り返りへのコメント確認 ・Week 10とWeek 11に自律学習支援室の学習サービス利用の課題が出る ・Week 13に冬期休暇中の学習計画記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・記入事項の確認とコメント記入 ・多読と外国語自律学習支援室提供のサービス利用実施確認 ・返却
Week 14 (1月8日)	<ul style="list-style-type: none"> ・冬期休暇中の学習記録の確認 ・3カ月間の振り返り実施→提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・記入事項の確認 ・回収

*外国語を通じて自律学習者の育成を目的として2014年に京都外国語大学・京都外国語短期大学に設置された施設。

3.2 学生が使用する学習方略や学習動機

学習記録手帳の記述終了日であるWeek 14(2019年1月8日)に『学習記録を取る事での気づき』、『秋学期の目標を達成するためにどのような工夫をするべきだったか』、『学習で成長したこと』の3項目に関する自由記述アンケートを実施した。自由記述アンケート結果はエクセルシートにまとめ項目ごとにコメントの相違点, 自己肯定感の高低, 修正能力の有無に注目をし, 分析をした。

『記録を取る事での気づき』に対するアンケート結果は2つに分類される傾向があり, 記録を取る事で学習量は把握できているが反省だけに終わるタイプか, 学習方法を修正し改善方略を考えることができるタイプかの2通りに分かれる特徴がみられた。

前者の反省だけに終わる学生は, 授業外時間の使い方が毎回うまくいかない傾向があり, Week 8から開始したインタビューより就労時間や通学時間が比較的長く宿題以外の学習に時間が費やせない事が理由の1つになっていることがわかってきた。

「反省だけに終わる」学生のコメント例

1. 「書く事で自分がどれだけ勉強したかしていないか反省できる。」(同様コメント複数)
2. 「自分がどれだけ勉強していなかったかに気づかされた。」
3. 「自分がサボっていることがよく分かったしサボり症なのがよりわかった。」(同様コメント複数)

後者の改善方略を考えることができる学生の特徴としては, 2年後の目標が進学(多くのケースで4年生大学への編入学)や就職(具体的な職種や業種の希望がはっきりしている)など既に明確に決まっている学生が多く, 短大2年間のスケジュール計画を早期に設定し, 進学に関しては応募の時期前までに, 就職の場合は就活をする前までに必要な語学資格試験や能力の養成が必要であることの自覚ができている傾向が強いことがわかった。

「改善方略を考える」学生のコメント例

4. 「毎週の自分の学習量に気づくことができ次への目標が見えた。」(同様コメント複数)
5. 「もう少し単語の覚える量を減らしたら続けることが苦しくなかったかもしれない。」
6. 「記録を付けるために自ら進んで勉強に取り組めて集中できた気がする。」

『秋学期の目標を達成するためにどのような工夫をするべきだったか』の結果は、「反省だけに終わる」多くの学生が時間管理や調整に努力をすべきだったという認識を示していることがわかった。それらの学生のコメントは下記である。

7. 「自分で時間を積極的に作るべきだった」, 「時間をとるべきだった」, 「時間をうまく使うこと」, 「空いた時間でできることを沢山する」

これらのコメントに関して注目すべき点は、時間をつくることも重要な1つと理解していることである。彼らは、授業外の時間は忙しく、利用可能な時間が限られていることへの認識が高い。それゆえに、有効に時間が活用できない場合には、どうにかして計画を実行しようと考え、彼らがすべきことと考えたのが時間の調整であったと理解できる。つまり、このタイプの学生は、計画をしたのち実行に移すための時間を作ろうと努力はしているが、計画通りに学習はできない傾向があるようだ。問題は時間だけではないが、時間の工夫を試みていた点は見逃してはいけない。このような時間管理や調整に注意が向くという行為は、一見当たり前のようであるが、数ある候補から時間を選択しているということは気を付けるべきであろう。このような学生に対しては、授業内時間を最大に有効活用することが有効な手段の1つであることが示唆される。

一方、「改善方略を考える」学生の多くは、学習方略を工夫する傾向にあることが分かった。それらの学生のコメントは下記である。

8. 「長文に慣れるためにとにかく多読をし長文になれた」, 「できる範囲での目標にする」, 「どんな調子でも電車でテキストを広げる」

計画した目標を達成するために必要なことは、具体的な学習活動に関する工夫であり、学習時間の確保は問題ではない傾向が強く出ている。先に述べたように、自らの学習活動を省察する過程を通して、このタイプの学生は、目標を達成するための調整をみずから行い明確な改善案を提案し実行することが出来ているとコメントから読み取れる。

『学習で成長したこと』への自由記述アンケート結果は、学生の実感となるため必ずしも語学力と学習意識アンケート結果と連動していないが、学生は「語彙力がついた」, 「多読課題が楽しくなった」, 「読む力がついた」, 「短期目標設定と計画が立てられ実施を試みる事が可能になった」の4ケースに分かれることがわかった。これら4つのケースは、学習記録の「学習プラン」

に学生自身が設定した学習事項（例、「1日10単語覚える」、「多読の本を1日1冊読む」等）に関連したものが多く、これは、客観的な量が把握できるため、学生がいく学習効果向上の実感へとつながったのではないかと推測できる。学習習慣に関連した精神的な成長がついたと実感する「少しだけ（学習を）継続する事を身につけられた」、「すこし勉強する気持ちが高くなった」、「外国の人に話そうとする意欲が高まった」、「忍耐力が強くなった」も自律学習者として見逃すことができないコメントである。精神的な成長を実感している学生の多くは、次のステップである目標を立てる、計画する、実行する、に近づいている過程であり、そのステップに移行するために、学習リソースの一つとして学習記録が有用であるということが推察できる。

4 つのケースのコメント例

9. 「単語力があがった。」（同様コメント複数）
10. 「多読が楽しくて本をたくさん読むようになった、新聞も（笑）。」（同様コメント複数）
11. 「週のあいだひとつひとつの目標に向かっていく姿勢が見られるようになった。」
12. 「計画的な学習を自主的に進められるようになったと思います。」

他の視点からのコメントも今後の学習記録研究に有用であるため紹介しておく。「他人からのコメントと（自分が）何を（学習）したかを見ることで自分ももっと頑張らないといけなと思えた」のコメントが示すように、学生同士での振り返りを有効にとらえた学生もいた。学生同士の友好的な学びの方法と活用は、将来調査研究対象に含めるべき課題候補である。

3.3 学習記録手帳の振り返りの効果

『春学期使用の学習記録シートと秋学期使用の学習記録手帳は、どちらの利用がより学習の副教材として利用しやすかったか』のアンケートを秋学期 Week 14 の授業内に実施した。その結果、13名の学生が学習記録手帳と回答し、2名が学習記録シートを選び、6名が無回答であった。つまり、学習記録の使用の仕方を変更したことに効果があったことを示唆する結果となった。学習記録手帳と回答した学生のコメントは、「先生に普段行っている事を個人的に伝えられ、勉強の記録もわかりやすいため。」、「先週の記述も必ずセットで見えるから。」、「学習項目がまとめられるので士気が高まる」、「書きやすく見返しやすいためノートの方がいいと思います。」等である。これは授業実践者である教員が学生のために何ができるかを考え、秋学期に学生が自身の学習を振り返るといふ課題を付け加えたことによる。春学期に使用した学習記録手帳には毎週実施した学習項目の詳細記録記入がないため、学習成果の過程を振り返る事が容易ではないが、学習記録手帳は学習した項目ごとに細かく記録ができるため、例えば「単語学習 10単語」などのように毎週実施した学習項目ごとに確認をし、最終的に300単語学習をした等成果を再度確認することができ、学生にとっては有益だったようである。学生は学習記録手帳に学習を記録することで、自身の好む学習方法の発見、または認識ができるようになった。例えば、ある学生は教科書を

使用するよりもインターネットリソースで勉強を好むことを発見している。また、学習記録手帳の使用により、学生は学習方法を見直すことができた。何をしたかをチェックし、4技能を均等に勉強するために他の領域の学習量を増やすなど、時間を調整しだす学生もいた。学習の成長の過程を自分で確認し、目標を達成するために調整が必要な場合は調整を行うため学習記録情報が活用できることが示唆されている。ちなみに、学習記録シートを選んだ学生のコメントは、「学習記録シートの方が簡単にかけるのでよかった」（同様コメント他1名）である。詳細に記入することを好まない、毎日記入したくない、面倒だと思ふ学生もいるのは確かである。

学生が自発的に学習記録手帳を使用し、目標達成のために活用するためには、どのような学習方略の提示・提供が必要であるかを引き続き研究調査の必要性はあるが、春学期と秋学期の学生の活動を比較すると、学生の学習に対する行動の変化や認識の変化に振り返りは有効であり、学習記録手帳の振り返り機能がその助けになったと考えられる。

3.4 担当教員による所見

学習記録手帳の記述コメントと授業中のやり取りだけでは学習者の個別のニーズを把握することは難しい。そこで、学習記録手帳をもとにインタビューを実施した。インタビューは授業開始前と後に設定し、一人10分間と時間を定めた。

前述の自由記述アンケート結果『記録を取る事での気づき』で述べているが、「反省だけに終わる」多くの学生の傾向は、時間をうまく管理できない、気持ちのがのらないなど、生活環境の改善が学習の前に必要だと担当教員は感じていた。そこで、インタビューでは、学生に学習事項のみならず生活全体について自由に語ってもらい教員は聞き手に回った。教員は、学生が自ら語ることで、過去を可視化し現在に焦点をあて未来に向けて何が出来るかを考えるきっかけを作るよう心がけた。学生の中には既に将来に向けての学習計画が確立されているケースがあり、その場合は、継続的で効果的な学習方法の確認と次のステップへの移行を学生が自ら気づき実行可能な方策を選択するよう、教員は学生の状況を共有し共感をしながらサポートをし、状況把握と学生に適した学習方法の探求につとめた。

インタビュー実施後、「反省だけに終わる学生」と「改善の学習方策を考える学生」の学習に対する行動と、教員の授業設計や授業運営に対する考えに変化がでているため、その点についても簡単にふれていくことにする。

「反省だけに終わる学生」がインタビュー後も改善しなかった事例1

学生A：授業に前向きに取り組み、もの静かで落ち着いた感じの学生。将来就きたい職業は明確であるが、目標設定が定まらず学習事項が定着しない学生

13. 学生Aは、「英単語帳を開く」と「多読をする」を学習目標にしていたが、「多読ができなかった」と記述することが続いた。ある週、「多読の部屋へ行く」と記入した次の週「多読をする時間がとれそうなので読む」と書いてある。学生Aは3週間連続で多読未実

施状態だった。同様の状態がつづきインタビューをしたが改善はされなかった。将来の夢には、高度な英語 4 技能が必要な事を理解していたが、インタビュー時はやる気を出すのが、その後行動に移せなかった。学習が進まない理由に通学に時間がかかりバイトをしているため学習時間が取れないがあった。学生 A は、安全で安心な時間帯に帰宅するために授業終了後 21 時にすぐ帰路に着きたいという希望があり、また学校に早く来ることはバイトの関係上無理であるため、学内施設を利用して学習をすることは困難であることがわかった。よって学生 A は授業時間に集中したサポートをすることが最善策となり、残念ながら学生 A に適した授業外学習方略の提案をすることができなかった。この種の学生には、授業時間内で完結する有効な学習方略はないか考えさせられたケースである。

「反省だけに終わる学生」がインタビューにより生活の問題を抱えていた事がわかった事例 2
学生 B：授業態度は良く、授業出席時は積極的に修学に励む学生。学習記録手帳の授業外での記入はほぼなく、毎回の振り返りで時間が無い、時間の管理ができない、と記入をしていた。

14. 学生 B は、将来の夢と短期目標がない。学ぶことは将来の糧になることを理解している。学校に来ることも楽しい。

「時間の管理ができない」と学習記録手帳に複数回コメントを残している。原因を聞くと、「学校に来る直前の夕方に目が覚めてしまう。毎日寝坊するので宿題や授業外での学習は全然できない。授業後就労し、家に帰って寝てギリギリに起きて学校に来ての繰り返しで余裕を持った生活ができない。」との返事であった。学生 B は学習ができてないのはさぼっているからでない事を教員に伝えるために時間の管理ができないと記入していた事がわかった。早く学生 B とインタビューをしていればと考えさせられたケースである。学生 B には生活を安定させ学習時間の確保をすることが優先であると考え、「授業の 3 時間前に起きて早めに学校に来るチャレンジをしてみましょう。出来たら学習記録手帳に記入していきましょう。」と学生 B と約束をした。その後、学生 B は徐々に 3 時間以上前に起きて学習ができるようになっていった。この種の問題を抱えた学生には、学習記録手帳に学習ができなかった同じ理由を複数週間続けて記述した場合、授業内での声掛けが重要であるというヒントを得た例である。10 分弱の短い時間でインタビューをすることで、学習環境改善の提案が可能となる事に気づかせてくれた例である。

担当教員は学習記録手帳のコメントとインタビューにより、将来の計画や目標が明確でない場合、目指す指標がないため、学習にやる気がでない傾向にある学生が複数いることにも気づいていた。そのため、学習方法の選択肢と経験を広げるために、自律学習支援室の紹介と利用を試している。学習方略については本論文の研究テーマから離れてしまうため、詳しく述べていれないが、学習方略の選択肢を増やすことは重要であることは確かである。下記の学生 C のケースで明らかのように、学習方略を適切に授業内で提示することは大切であると感じた。筆者らは、授

業中での観察から学習記録手帳以外の学習方略の提示・提供が必要な学習者が、コミュニケーションは取れるが、やる気を高める方略を持ち合わせていない学生であるという傾向に気づいた。

「反省だけに終わる学生」がコミュニケーションにより改善した事例3

学生C：明るい性格で積極的に質問をする学生。修学意欲は高いが、学力が伸び悩んでいる。学習記録手帳には計画した学習や課題ができず反省を何度も繰り返していた。

15. 授業内に「先生、どうしたら多読ってできますか。」の質問を受ける。

振り返りの記述を見ると「(多読) できていない」と書いてあった。学生Cは本を借りるタイミングを見失い多読を忘れてしまったことがわかった。教員は、「今日の授業後そのまま図書館へ行って本を3冊借りますよ。」と提案をした。学生Cが本を読めたのはそれから2週間後だった。学生Cは学校に早めに来て本を読んだのである。教員は、自身が提案した図書館で本を借りて読むよりも、学生Cには本がある場所に行きそこで読む方法が適していた事がわかり、学生には異なる学習方略があることに気づかされた。また、コミュニケーション能力の高い学生や、授業で発言を多くする学生は短期大学という学びの場が好きな傾向にあるため、その特性を考え学習方略を提案するのも大切であると痛感したケースであった。押しつけの学習指導をしてはいけないと気づかされた貴重な例である。

これらは3事例ではあるものの、これらの学生は担当教員とコミュニケーションがとれ、快活で元気があり、また、授業に毎回出席をし、学習記録帳も毎回忘れず持参し提出をし、短期大学という学習環境は心地よく、学びに対して後ろ向きというわけではないという共通の特徴をもつ。担当教員は今後、そのタイプの学生のやる気をどのように高めるかの方略を検討することが、学生の学習行動に結びつくため、学習記録手帳と教材開発にとって貴重な情報がふくまれた事例であったと感じている。

一方、「改善方略を考える」学生は、学習改善を自ら行い目標の達成をしている、目標の見直しをする際、目標を修正する傾向が高いことがわかった。より具体的には、修正内容の特徴を注意深く見ていく過程にインタビューをすることで、短期大学の2年間を現実社会に出る前の準備期間という認識が形成されていることがわかった。

「学習方略を考える学生」が目標変更により方略を再度自発的に変更することができる事例4

学生D：将来の夢と将来への学習計画が最初からしっかりしていた学生。まじめで授業態度もよく、習熟度もクラスの中で高い学生。

16. 学生Dは、1年秋学期の目標をTOEIC400点、卒業時の目標をTOEIC500点としていたが、TOEICは500点以上ないと履歴書に記入ができないと知り、TOEIC500点を1年次秋学期の目標数値に修正した。学生Dは春学期の早い段階からキャリアプランニングを実施しており、社会に必要な語学資格試験の基準が最低TOEIC500点と秋学期に把握した瞬

間に2年間の計画を見据えて修正の調整をかけている。学生Dは、定期的に自律学習支援室のサービスを利用し様々な学習方略を活用し自律学習者の道をたどっていた。学生Dには過度な干渉は不必要と教員は判断していたが、学生Dより早期のインタビュー実施の依頼を受け、考えを改める。学生Dは目標の変更を早期に教員に伝え承認をえたかったと話している。学習方略を考え実行できる学生であるが、確認を教員と共有することは当該学習者にとっては必要な行為であり、学習記録手帳への教員からのコメントは学習の後押しになっていることがインタビューより分かった。習熟度が高い学生は一人で学習の計画と実行が可能であろうと教員は考えていたが、まだその時期ではなかったと考えさせられたケースである。学生Dの事例より語学とキャリアプランニングが同時に行える学習記録手帳の可能性も示唆されたケースでもあり、教員の学習指導への視野を広げてくれた貴重な例となった。

「学習方略を考える学生」が進路変更により方略を再度自発的に変更することができる事例5

学生E：入学時より習熟度が高い学生。授業態度はよく授業中や後に学習に関する質問をする修学に積極的な学生。また明るい性格。

17. 学生Eは、1年秋学期始めまで進学を希望していたが、秋学期途中で就職に変更したことで、キャリア英語科の専攻言語「英語」の資格を優先した学習計画に調整をした。最初の目標は第二言語の習得であったが、秋学期の中間地点で「1年生はTOEICに集中」とし、学習プランも「TOEICの表現コアを毎日5個ずつ覚える」と積極的に調整している。インタビュー時に学生Eより将来の夢と英語に集中すべき理由について説明があり、学生Eは将来就きたい職業の詳細をしらべ明確なヴィジョンのもとに学習を実施していることが理解できた。学習記録手帳のみの効果ではないが、学習を自ら進めていける学生の場合、2年間の計画を臨機応変に変更できことが確認でき教員は適切な支援体制を整えることが可能となる。そのため、学習記録手帳があることで現在の学習を何のためにという動機の確認ができるため学習記録手帳の有効性は高いと感じたケースである。

これら2事例から、入学当初より英語の習熟度の比較的高い学生に多い傾向であることと、将来の夢や目標がより具体的で明確になっていることがわかった。これらの事例の学生は、より丁寧に詳細な学習記録を記入しており、継続的な学習活動をほぼ1年通して行っている。このタイプの学生の語学力は1年間を通して向上している傾向が強い。

学習記録手帳を授業で利用した場合の利点として、既に「3.2」の部分で述べているが、学生同士の振り返りは学習者を成長させる可能性を秘めている。学生Fは学習記録手帳に「私は多読できていないので（学生Cを）見習って頑張りたいと思います」と他の学習者からコメントをもらっていた。そのコメントへの返事に「私も頑張る、共に」と学習者同士で助け合い励ましあいながら学習を進めていこうという意識が記述されていた。同じ学習者として互いを理解し支

えあい、教室内に前向きな学習意欲が広がる見えない効果が出ているように感じ、学習者同士の振り返りを効果的に導入するタイミングと方法を考えるきっかけとなった。

新たに明らかになったこととして、学習記録手帳にした記録より、学生がスピーキング活動を実施した際、どのように何を利用してスピーキング学習を実施したかの記録を記入しない傾向があることがわかってきた。4技能の学習項目のうちスピーキング技能の向上のために「シャドウイング」や「音読」といった学習活動もほとんど実施している記録は見受けられなかった。数少ないスピーキングの学習記録記入例は、「河原町で外国人に道を聞かれた」等である。スピーキング力を上げる学習方略の提案や、授業内に英語で話す学習活動を学習記録手帳に取り入れていくのはどうかと考えるきっかけをもらった結果である。

学習記録手帳を授業内で利用した授業と使用しなかった授業では、教室内での学習環境に違いがでていいる。授業担当者としての肌感覚となるが、学習記録手帳を利用した授業の学生とは距離が近く感じ、修学アドバイザーとして学期に数回インタビューをするよりも、毎週学習記録手帳を交換することによる人間関係の構築がより建設的にできた感覚が強い。個々の学生の得手不得手への理解が深まり、授業計画をする際、この課題は学生Aに、この問題は学生Bに、というように学生一人一人が得意な分野の学習発表ができるような授業展開をすることが可能になった。学生の顔がより見えるようになると、派生事項として授業が格段に行いやすくなり、クラスの雰囲気は良くなる、という効果があったことは確かであり、学習記録手帳には個々の学生への学習方略としてだけでなく、クラス全体の学習環境に有効な手段であると考えている。

4. まとめ：自律学習支援デザインへの示唆

本稿では、夜間短期大学学生の自律性育成方法を探ることを目的に、学習記録手帳が学生の振り返りにどのように影響するかを記述するために、学生は何を实践し、どのような気づきをしたのか、また、授業担当教員は学生をどのように理解し、どのように対応し、結果どのような成長をしたのかを分析した。結果、担当教員の振り返りと気づきにより、以下のような自律学習支援デザインへの示唆を得た。

1. 学習記録手帳の記述と提出を評価対象に含めることが効果的である
2. 学生－学生間や学生－教員間に対話が生じるタスクを学習記録手帳に含めることで、意味の再構築が生じる
3. 教員は目的を達成する方法に複数あることを自覚し学生のやり方を尊重することで、学生の自律性が高まる
4. 「反省だけに終わる」学生に対しては、授業内での学習を通して学習を動機づける

学習記録手帳の提出を評価に含めることは、学生に提出する理由を作り出し、学生の学習記録手

帳記入を促した。また、教員や学生とのやり取りを通じた気づきにより、学生は主体的に学習計画を実施し、途中で目標設定や方法の変更する能力を身に着けた。つまり、学習記録手帳による学生-学生、学生-教員間の対話が学習の場のデザインに役立つことが示された。Brockbank et al. (2002) は、“Reflection-with-others, or dialogue, offers the power of challenge and different perspectives to the learner, and ultimately the potential for double-loop learning” (p. 21) と、他者との振り返りや話し合いは、異なる視点やダブルループ学習（新しい価値観での学習）の可能性を提供することを示した。これは既存の知識に意味が加わるだけでなく、さらにその新しい知識が修正され発展されるなかで、意味の再構築が行われることを意味する（Quinn, 2000）。たとえば、教員やクラスメートと学習方法を話し合う中で新しいやり方を学ぶと、学生は今までのやり方の調整を行い、修正や改善を通して目的を達成することが可能となる。伊藤（2009）は、知識を単に記憶するだけの知識にせず、適用できる生きた知識にするためには、その知識を自分の言葉で説明することが重要であるとし、言語化することの価値を主張している。

また、アンケートとインタビュー結果から、「反省だけに終わる」学生や就学やその他のことで忙しく自律学習時間を授業外で十分に確保できない学生には、一回の授業時間内で効果的に取り出せる学習目標の設定とその達成を実感させるよう授業デザインの必要性が示された。たとえば、授業内活動で学習スキルや生活習慣（例、適切な言葉の使用、適切なコミュニケーションのとり方）を身に着けさせたり、達成可能な簡単なタスクと一緒に考えたりする（例、来週までに単語を10個覚える）などである。Shanker（2016）では、ストレスを取り除くことで自己主導型の学習の余地が脳に生まれる、言い換えると、学習に十分なエネルギーが残されることで学習に集中できると提案している。このような達成可能な学習量は一つの解決策になりうるもので、期待できる。

授業外での支援についても指摘しておく。短期大学生が自律した学習者となり、2年後の卒業に向けて計画を立て、計画を実施し目標を達成していくためには、必修授業の時間や修学アドバイザーとのコミュニケーションが大切である。しかし、異なる状況に身を置く短期大学生と夜間の必修授業配置時間の現状は、修学アドバイザーとの面談実施を難しくしつつある。また、短期大学生が学内に滞留する特に必修授業後の時間に利用可能な学内施設と利用時間が限られており、短期大学生が教職員と、また学生同士で会話をする場所や機会が少なくなっている。教育の質の保証と同様に学内施設にアクセスできるよう施設利用の保証も図り、最終授業終了後少なくとも1時間学生が滞在できる学内環境が理想的である。短期大学生は2年後の自分を具現化し、社会で即戦力となるような教育機関になればと強く期待を膨らませている。そのためにも、短期大学生が学生生活を有意義に送るための学内環境づくりは授業改善と同様に重要であり、様々な観点からの学内環境を短期大学生のために整えることは必要であると考えられる。

最後に、本稿の意義について述べる。まず、このような学習記録手帳を使用した自律性の確立は教科学習にとどまらず、就職活動等における自己分析や、生涯学習における自律的な学習者としての自己形成に役立つという利点があり、短期大学生の学習活動を補完するものである。また、

学習リソースの向上に資するために、学習記録手帳を活用した取り組みを通じたより適切な学習支援の仕組みを整備することは、各学生が抱える様々な学習課題を解決するだけでなく短期大学また学園にとっても意義がある。さらに、アクション・リサーチにより教員と学生が一緒になって学習方法を可視化しながら、より良い方法を探索的に見つけたことは、両者の情報の非対称性の是正に貢献し、間主観的な合意の上での学習活動を提供するという意義がある。

今回の授業実践からは、自律学習を支援する方法の一端が明らかになったが、動機付けの低い学生への対応は別途考える必要性が明らかになった。今後は動機付けの低い学生がどのような問題を抱えているかを明らかにするために質的な研究を進めていく予定である。

謝辞

本稿の執筆に際し、有益なコメントを下された近藤睦美氏、査読者の皆様には心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 秋田喜代美他編 「学校でのアクション・リサーチ — 学校との協働生成的研究 —」 『教育研究のメソドロジー：学校参加型マインドのいざない』 東京大学出版会 2015. P.163-183.
- 青木直子他編 『日本語教育学を学ぶ人のために』 京都 世界思想社 2001. P.182-197.
- Benson, Phil. "Drifting in and out of View: Autonomy and the Social Individual" P. Benson, & L. Cooker eds. *The Applied Linguistic Individual: Sociocultural Approaches to Identity, Agency and Autonomy*. Sheffield, Equinox Publishing, 2013. pp.75-89.
- Brockbank, Anne. et al., *Reflective Learning in Practice*. Aldershot, Gower Publishing, 2002.
- Brockett, Ralph. G. & Hiemstra, Roger. *Self-direction in Adult Learning: Perspectives on Theory, Research and Practice*. New York, Routledge, 1991.
- Burns, Anne. *Doing Action Research in English Language Teaching*. New York, Routledge, 2010.
- 衛蓄他 「良い学習教材とは何か — マップ調査からの検討」 『山口大学文学会志』 61 山口 山口大学文学会 2011. P.25-48.
- 原口佳典 『100のキーワードで学ぶコーチング講座』 大阪 創元社ビジネス 2010.
- 原口佳典 「コーチングの研究における質的研究の可能性～看護研究から」 『支援対話研究』 2 一般社団法人日本支援対話学会 2014. P.84-100.
- Holec, Henri. *Autonomy and Foreign Language Learning*. Oxford/New York, Pergamon, 1981. (First published 1979, Strasbourg: Council of Europe).
- International Coaching Federation, Updated ICF Core Competency Model, 2019.
https://coachfederation.org/app/uploads/2019/11/ICFCompetencyModel_Oct2019.pdf.
- 石川美智他 「看護におけるコーチングの活用とその効果 — 国内の文献レビューを通しての分析」 『獨協医科大学看護学部紀要』 5 (2) 栃木 獨協医科大学看護学部 2012. P.1-11.
- 伊藤孝昭 「学習方略としての言語化の効果 — 目的達成モデルの提案」 『教育心理学研究』 57 一般社団法人日本教育心理学会 2009. P.237-251.
- 岩田純一 『子どもの発達の理解から保育へ — 〈個と共同性〉を育てるために —』 京都 ミネル

- ヴァ書房 2011.
- Knowles, Malcom. S. *Self-Directed Learning: A Guide for Learners and Teachers*. New York, Association Press, 1975.
- 河野弘美他 「自律学習記録と振り返りによる気づき：インタビュー調査を通して」 『日本教育工学会研究報告集』16 (2) 日本教育学会 2016. P.171-178.
- Lewin, Kurt. “Action Research and Minority Problems” *Journal of Social Issues*. 2(4), New Jersey, Wiley-Blackwell, 1946. pp.34-46.
- Little, David. *Learner Autonomy 1: Definitions, Issues and Problems*. Dublin, Authentik. 1991.
- Quinn, Francis. M. “Reflection and Reflective Practice” C. Davies et al. ed. *Changing Practice in Health and Social Care*, London, Sage, 2000. pp.81-91.
- Reeve, Johnmarshall. (1996). *Motivating Others: Nurturing Inner Motivational Resources*. Boston, Allyn & Bacon.
- Reeve, Johnmarshall. et al., “What teachers say and do to support students’ autonomy during a learning activity” in *Journal of Educational Psychology*. 98, Washington DC, American Psychological Association Inc, 2006. pp.209-218.
- Ryan, Richard. M. et al, “Self-Regulation and the Problem of Human Autonomy: Does Psychology Need Choice, Self-Determination, and Will?” *Journal of Personality*. 74(6), New Jersey, Wiley-Blackwell, 2006. pp.1557-1587.
- Shanker, Stuart. *SELF-REG: How to Help Your Child (and You) Break the Stress Cycle and Successfully Engage with Life*. London, Penguin, 2016.
- 坂本聖佳 「初めて急性心筋梗塞を発症した壮年期の男性患者への GROW モデルを用いた生活指導」『福岡赤十字看護研究会集録』56 (32) 福岡 福岡赤十字病院看護部 2018. P.32-35.
- 佐野正之 『はじめてのアクション・リサーチ』大修館 2005.
- 谷村緑他 「オーラルリフレクション——英語学習者の学習ふり返り実践」 『日本教育工学会研究報告集』17 (2) 日本教育工学会 2017. P.129-136.
- Whitmore, John. *COACHING for PERFORMANCE: The Principles and Practice of Coaching and Leadership. 5th Ed.* London, Nicholas Brealey, 2017.
- 横溝紳一郎 「実践研究の評価基準に関する一考察——課題探究型アクション・リサーチを中心に」『日本語教育』126 日本教育工学会 2005. P.15-24.
- 横溝紳一郎 「教師が共に成長する時——協働的課題探求型アクション・リサーチのすすめ——」吉田達弘他編 『リフレクティブな英語教育をめざして：教師の語りが拓く授業研究』ひつじ書房 2009. P.75-118.

補足資料1：学習記録手帳の使用例

「Independent Study Book」(©2018, Hiromi KONO, Midori TANIMURA, minoon soft)

学期スタート地点で目標が明確な例1

1年次各学期の目標

2018年春学期始め時点

1年次 春学期の目標	TOEIC 目標: (TOEIC、600点) その他の資格試験: (英語技能検定、準1級/点) その他の資格試験: ()
---------------	---

↓

2018年秋学期始め時点

1年次 秋学期の目標	春学期は多読10万語を達成したの7秋学期は20万語達成 TOEIC 目標: (TOEIC、600点) その他の資格試験: (英語技能検定、準1級/点) その他の資格試験: ()
---------------	--

↓

2018年秋春学期始めの目標設定の修正版 (Week 6 実施)

1年次 秋学期の目標 修正版	(修正した主な理由:) 修正なし TOEIC 目標: (TOEIC、点) その他の資格試験: ()
----------------------	--

2018年秋学期始め時点

将来の夢

空想で働かせる

2018年秋学期始め時点

2年次 の目標	春学期の目標 TOEIC 目標: (TOEIC、620点) 【英検準1級取得予定】 秋学期 (卒業時まで) の目標 TOEIC 目標: (TOEIC、700点) []
------------	---

秋学期の目標を達成するための学習プランを具体的に2つ立てましょう

	学習プラン	修正版学習プラン (Week 6)
例	単語を毎日10個覚える、通学時/映画を字幕で一週間1本見る	
1	TOEICのリスニングを毎日聞く	TOEICのリスニングを長文に毎日聞く
2	英検の問題を毎日読む	英検の問題を1日20問読む

秋学期の振り返り (Week 13 実施) 学習プラン1と2について

達成できたこと	TOEICと英検の両方の長文読解が向上した
達成できなかったこと	英検のリスニングを毎日読んでできなかった

(Fun easy learn 1)
Let's make a trip to the future! 未来へ旅に出よう!

自律学習が進められている例2

学習記録ノート

Week 2 : 2018年10月6日(日)~14日(日)

宿題課題リスト (実施した授業内課題: 多読含む(多読はトータル冊数と語数))

科目	宿題課題	実施 (○/×)
Reading & Writing II	Extensive Reading Program	4冊 (2000語)
Reading & Writing I	Lo-Sans lesson: A chinese Folk tale	1331語
編入英語II	Chapter 4 秋	
English Seminar I	Presentation's Preparation	
数的理解	11月7日&8日の	
セミナー中間考	総合演習の中間	

始めに立てた学習プランの実施状況 (授業内で記入)

学習プラン1について	学習プラン2について
出来たよ。@	出来たよ、聞こうを 変えようか聞いてます。@ どうですか? 果ては...

学習プランと宿題課題以外に学習したこと

学習したこと	学習目的
(記入例) TOEICの参考書パート1を実施(10問×3日)	TOEICスコアアップ学習
NINJA利用: 自習テキスト学習	English Seminar II Presentationの練習
Listeningを聞いた	Listeningの向上
中国語 CVを聞いた	中国語検定の学習

1週間の学習振り返り (授業内で記入)

一週間の振り返り学習に関して次週に繋げるための意気込みを記入してください	引き出しができた。 Listeningの練習を工夫して 更なるレベルアップが できるよ!
--------------------------------------	---

Week 1~5にNINJAを利用しましょう: 利用方法はいろいろありますが利用した場合、「学習プランと宿題課題以外に学習したこと」の「NINJA」の欄に1週間分まとめて記入してください。

(Fun easy learn 4)
Explore all avenues. あらゆる道を探ろう。

補足資料2：インタビュー項目（学生に対する）

インタビューは学習記録手帳を参照しながら実施。インタビューの質問項目は下記の5つ。

1. 将来の夢と将来に向けての学習計画
2. 秋学期の目標と2年次の目標
3. 一週間のスケジュール
4. 7週（それ以上の学生も有り、面談実施日により周の数は異なる）の学習実施記録への振り返り
5. 学生が抱えている問題点や悩み

補足資料3：インタビュー項目（担当教員に対する）

インタビューは定期的に行われた。

1. 授業内で実施した学習記録手帳の課題の概要を伝える
2. 「1」のうち気になる学生の反応やコメントについて
3. 「1」の教員の感想や学生と話した内容について
4. 教員が学生とのインタビューで改善したと感じた事
5. 教員が学生とのインタビューで改善できなかったと感じた事
6. 授業内での学生の変化
7. 授業内での教員の変化

以上

